

明治期の旧制中学における運動会の研究 (2)

—明治36・37年の明倫中学の運動会—

秦 真人

A study of Athletic meets in old system Junior High School during the Meiji era (2)

— the Athletic meets of Meirin Junior High School in Meiji36・37 years —

Mahito Hata

キーワード：運動会 Athletic meets、旧制中学校 old system Junior High School、明治時代 Meiji era

はじめに

今日、国民体育大会を筆頭に日本で開催されている数々の総合スポーツ大会は、近代学校教育の中で実施されていた運動会がその歴史的基盤となっているといっても過言ではない。

わが国初の運動会は、1874(明治7)年3月に海軍兵学寮でイギリス士官の指導のもとにおこなわれた「競闘遊戯会」がその端緒であると言われ、その後1878(明治11)年5月に札幌農学校で「力芸」として、さらに1883(明治16)年に東京大学でおこなわれた「運動会」へと続く。そして、わが国の教育現場における「運動会が全国的に普及するのは、1884(明治17)年以降のことであり、体操伝習所の卒業生によって中学校、師範学校、そして小学校へと下降・伝播していった¹⁾。

愛知県下の旧制中学校では1893(明治26)年11月5日に、愛知県第一中学校(現；旭丘高校、以下「愛知一中」)の校庭で初めて行われた運動会がその端緒であろうとされているが²⁾、その後の明治30年代に各旧制中学に於いて毎年、大々的に開催されていった。先行研究として行った(1)では、明治33年と34年の愛知県第三中学校において開催された運動会の事例を見てきた。そこでは、運動会開催の背景や賞品に関する詳細な記録から愛知三中、独自の特徴をも見ることができた。

本研究では引き続き、愛知県の旧制中学に焦点をしぼり、明治期に実施されていた運動会の模様を、残存している史料の検討から、その実態の一部を明らかにしていこうとするものである。

今回は現在の愛知県立明和高等学校の前身である私立明倫中学校(以下「明倫中学」)の事例を、当時の史料である校友会雑誌の分析から進めていく。

1. 明倫中学と日比野校長について

私立明倫中学の前身は1783(天明3)年に、第九代尾張藩主、徳川宗睦が藩校として起こした明倫堂であり、その後一般に開放して庶民教育を行ない、1869(明治2)年には明倫堂の号を廃して武揚学校に受けつがれていった。その後、1899(明治32)年に私立中学校設立の件を文部大臣より認可を受け、校主徳川義礼は翌年1900(明治33)年4月1日に名古屋市東区東白壁町に初代校長海部昂蔵を迎えて私立明倫中学校を開校した。私学であった明倫中学は1919(大正8)年に愛知県へ移管が認可され、愛知県立明倫中学校と改称した。

この間1903(明治36)年に、それまで明倫中学の特別会員として教育顧問をしていた愛知一中の校長日比野寛を第三代の校長として迎え、明倫中学の運動奨励についても推し進め、運動・スポーツ活動に多大な影響を与えた。その様子は、校友会雑誌「明倫」の中の幾多の記述の中

にも顕著に著わされている。

日比野校長は1903(明治36)年から1906(明治39)年12月までのわずか4年弱の間、愛知一中の校長と兼務する形でその職に尽力し、この間に開催された運動会の記録も細かく残されている。

就任の年1903(明治36)年に全校舎新築落成として、その紀年式典と記念大運動会を催し、校友会雑誌「明倫」の第1号が発刊された。また日比野寛校長就任の翌年には、学校認可記念、校旗拝戴記念式とその記念大運動会が催されることとなる³⁾。

日比野校長は運動奨励に関する論説を、愛知一中校友会雑誌「学林」を中心に、数多く記しているが、中でもその考えが端的に表された「運動の眞義」と題する講演の一部をまず紹介しておく。

「夫の優劣を争ひ、勝敗を競ふべき競技的運動に於ては、勇往、邁進、不撓、不屈、克己、忍耐及心力集注の美德等、自ら修養するを得るものにして、運動時に心力を運動に集注するは、即ち脳裏を廓清するの一手段にして、これが為めに、諸般の妄念を散尽し、忌むべき情慾を蕩滅するを得るの功あるものなることは、更に疑を容れず⁴⁾」と運動を行うことの効果を説くともに、当時、野球を中心として運動を行う際の弊害が取りざたされ始めたことを捉えて、「うれ青年学生の運動をなすや、運動専門家にあらず、徒ひて運動の為めに、学業を廃業するは、本末を誤れるものにして、学生は終に学生たり、学生としての本分を尽し得る材幹たらんが為めの修養を積まんが為めに、運動を奨励して、心身を鍛錬せしむるものたり、この故に学生が運動をなすや、徒に賞品の為めに、競争するの念あるべからず(中略)優勝を誇り、劣敗に屈するの愚に陥るべからず、对手は我の良師益友なりとして尊重し、決して侮蔑する等のことあるべからず⁵⁾」とその取り組みの姿勢に対しても、勝利至上主義に陥ることなく、行うべきことを表している。

この様に日比野校長の下で、運動に対する環境が整いつつあった、明治36年と明治37年の明倫中学における運動会の模様を実際に見ていこうと思う。

2. 「新築落成式記念大運動会」(明治36年)

前述したように明倫中学における運動会の記録は、1903(明治36)年の6月24日に行われた新築落成式記念大運動会が最初のものである。「九十の春光全く其跡を収めて、木々の嫩葉緑漸く深く、人心春眠より覚醒して、奮振一番、来ん赫帝と戦はむとする好季節、昨年来竣功を急ぎし我校の建築も、日に月に其歩を進め、工匠の手腕、委員の苦心、両々相俟ちて、其功を奏し、三十有余間の長廊連延たる大教場四棟は、校の中央に盤踞し、其東方の空地には、壮大宏嚴、人目を眩せんばかりの大講堂は聳然として地を抜く数十尺、屋上鳩八の瓦は、輝々燦々として白日に照映し、黒塗りの校門は、東方建中寺の鬱蒼たる森林に相對して門扇を開き、私立明倫中学校の七大文字は、門柱高く掲げられぬ、其の筆勢適にして勁、是に於てか我等の希望せし学校は、竣功せり、諸般の準備は、全く整頓せり、我等は此校に此室に、日に月に、学業を切磋するを得んなり、琢磨するを得んなり、嗚呼明治三六、水無月廿有四日、此日実に此日こそ、我等の前途に一道の光明を認識せるの日なり、実に我等の進むべく一條の針路を発見せるの日なり、我等の終世頭を去らざる一大祝日なり、嗚呼五百の健児は、此日に於て絶叫しぬ、明倫中学校万歳⁶⁾」と言ったくだりで始まる。

そして、「此日一天拭くが如く、寸翳を点せず、待ちに待ちたる我校の健児等、今日こそは我鐵脚の程を示してくれんものと、互に語りつ誇りつ、朝まだきより続々と校門目懸けて押寄せたるが、係員の苦心にて、諸般の準備全く整頓し、高大なる緑門三湾は、東西南の諸門に稜めしく立ち、会場を飾りたる万国旗は、七色交参、奇彩陸離として朝風に翻り、坐に本日の盛況を思はしむ、既にして延長四十余間の来賓席は、帽影衣采、雲団花簇し、復、立錐の余地なし、時針七時を報じぬ、数発の砲声は、碧落を劈破して轟けり、個はこれ開会の報知なり⁷⁾」という記述が続き、その中で当時の盛況ぶりの様子がうかがわれる。

競技の模様も、その様子の詳細がうかがわれる記述が残されているので、競技の内容が分かる部分を残しながら、少し見ていくことにする。

「第一回二百ヤード(小ノ小)は行はれぬ、これ本日の初舞台なり、スタートラインに集ひ、臂を張り手に唾して、待ちに待ちたる健児の一群は、ズドンと一発砲声を後に、驀然奔馬の如く馳出したり、今日天晴名誉の先陣佐々木は誰ぞ梶原は誰ぞ、転瞬の間に、優者は決せられぬ⁸⁾」と、この二百ヤード競走については、当時の最も主とする競走種目であったようで、現在の100メートル走に相当する競技であったと推察される。次に続けて引用を進めるが、以下に勝者の姓名は省略して見ていく。

「第二回は提灯競争(中)にして人員頗る多く、スタートラインは、所狭き迄に詰めかけた五十余名の競技者は、各々提灯を手にしつつ砲声一発、潮の如く奔出せり、提灯片手に燐寸を求むる者あり、燐寸尽きて茫然たる者あり、而して衆を抜きて決勝点に帰着せし者は、(中略)

第三回戴囊スプン(大)は開始せられたり、皆何れも頭上に砂袋を戴き、手には球を戴せたる杓子を携へて、腰を低うして走れり、中途に至りて、砂袋を落す者、球を転落さする者等、人をして抱腹絶倒せしむ、群を抜きて早くも勝を得し面々は、(中略)

第四回二人三脚(中)此技こそ共同一致、三脚三差、蹣跚疾馳して、勝利を得たる殿原は、(中略)折しも太陽は益輝々として笑めるが如く、会場の両側に控へたる音楽隊は、勇壮なる譜を奏し、其声嚟唳として、満場を響き渡りて一層の盛興を加へたり、又市人の見物山の如く、さしにも広き運動場もここ一寸の空地なき迄に至れり。

第五回四百ヤード(小)何にくそ、敗る者かと韋駄天の如くに走り出せし三十余名の若者、早くも賞は左の諸氏に帰しぬ(中略)

第六回竹馬競争(中)我こそは多年練磨の腕前、竹馬とばして乗り馳けくれんと、皆々一上一下、飛びつ跳りつ走り出したるが、途中にて僕地に落馬する者あり、又馬を傷けて切齒する者等あり、逸早く決勝点に走り着きし面々は、(中略)

第七回二百ヤード(大)こは何れも本校名うてのランナーが、志願せし競技なれば、今朝来第一の見物にて、一発の砲声と共に、疾風の如く奮進せり、鐵脚急馳、前後決勝点に達せし(中略)

第八回秘密競走(小)は未だ曾て本県下の諸学校に於て行われし事なき滑稽にして、其の趣向極めて斬新なり、即ち会場の中央、彼処此処に数十の大袋を散置し、其中に蔵むるに、僧侶、神官、小僧、百姓、職人等の衣裳を以てし、競技中、手早く此衣裳を抜きて決勝点に着けるなり、砲声一発、数名の殿原、一斉に出発せり、袋の口を開き上下を転倒して着くる者あり、股引を過ちて表裏相反してはく者あり、狼狽の状、異様の風、見る人をして思はず絶倒せしむ(中略)

第九回障害物レース(中)は我こそ平常器械体操、特意の鐵腕を現しくれん者と、塵を蹴り立てて、馳出せし雄々しさ、第一壘とも言ふ可き囊を鼠の如く跳脱して、目指す第二壘は大なる高き塀、苦もなく登り、次は竹渡り、漸く此壘を通過すれば、最後の難関は樽くぐり、之も軽業の如く抜き出でて、金鷄勲章を得し人こそ、本日の原田重吉ならめ(中略)

第十回提灯競走(大)此種の競技は、趣向深き為か、志願者頗る多く、第一回は五十余名に過ぎたりしに、此度は六十余人の大数となり、早く馳着けずば、臍を噛むの悔あるべしと、数十の健児は、一度にどつと逆巻く濤のそのの如くに飛出し、点火をいそぎて手を焼く者あり、提灯のみを以て狼狽する者あり、中には走る事遅き為、提灯さへも得るに由なく、徒手根めしげに人を眺むる者あり、点火一番、決勝点には早や、着砲の轟く頃未だ狼狽、点火に余念なき者ありしが、其結果は報ぜられぬ、(中略)

第十一回サック競走(小)砲声遅しと飛び出す面々、半身は袋に埋まり、一步一蹶、兎の如く飛着たる(中略)

第十二回雨装競走(小)此も他に多く類を見ざる競技にして、雨傘高下駄、雨中の裳装美々しく、本日の助六は誰あらう、(中略)

第十三回二百ヤード(大の小)競技回数を加へて益々佳境に入り、前回に失敗せし面々は、此度こそはと唾手し、前回賞を得し者も愈猛りて、競技は早く終わりを告げぬ、(中略)

第十四回二人三脚(小)は開始せられ其受賞者は、(中略)

第十五回戴囊スプン(中)は四十余名の多人数を以て、雑踏喧噪の間に終りを告げぬ⁹⁾」と前半

15種目までの結果内容が記されている。競技的なものは二百ヤード競走が中心であり、この日のメイン競技であったのは第七回の二百ヤード(大)であった。その他に提灯競走や二人三脚などのレクリエーション的競技についても、多数行われていることが特徴的であった。この後、エキシビション的な催しとして、名古屋市内の剣客による各流派の模範試合が挟まれている。その様子は、「時正に九時に垂んとする頃なり、此日名古屋地方有名の諸剣客を招待し、講堂前の空地に於て、各兵法の型、及び各剣客の試合ありたるが、軼倫の健腕、絶無の妙技、虎嘯き龍怒るの概ありて、観者をして肉躍り血熱せしむ、其組合は左の如し、

- 新陰流兵法形之部
- 柳生流兵法形之部
- 諸流剣術試合之部
- 諸流槍術形之部
- 諸流槍術試合之部
- 諸流剣術試合之部
- 諸流薙刀術形之部
- 諸流薙刀試合之部
- 諸流鎗術試合之部
- 柔術形之部¹⁰⁾

と記されている。

その後、後半の競技種目については以下のように続く。

- 第十六回 秘密競走 (中)
- 第十七回 旗取競走 (小)
- 第十八回 竹馬競走 (大)
- 第十九回 四百ヤード
- 第二十回 一二年級各組ミックスクラスリレー
- 第廿一回 二百ヤード (中)
- 第廿二回 六百ヤード (大)
- 第廿三回 障害物競走 (小)
- 第廿四回 二人三脚 (大)
- 第廿五回 提燈競走 (小)
- 第廿六回 盲人競走
- 第廿七回 秘密競走 (大)
- 第廿八回 竹馬競走 (小)
- 第廿九回 旗取競走 (大)
- 第三十回 器械体操競技

- 一、鉄棒海老上り 弾道跳び 外に特技
- 二、棚尻上り 倒立 外に特技

- 三、木馬二節閉脚 外に特技
- 第三十一回 サック競走 (大)
- 第三十二回 四百ヤード (小の大)
- 第三十三回 二百ヤード (中)
- 第三十四回 戴囊スプン (小)
- 第三十五回 障害物 (大)
- 第三十六回 八百ヤード競走
- 第三十七回 秘密競走
- 第三十八回 武装競走
- 第三十九回 雨装競走 (大)
- 第四十回各 高等小学校選手競走
- 第四十一回 二百ヤード (大の小)
- 第四十二回 背進競走
- 第四十三回 四五年級各組ミックス、
クラス、レース
- 第四十四回 中学校選手競走
- 第四十五回 有志競走
- 第四十六回 有志競走
- 第四十七回 来賓競走
- 第四十八回 本校職員競走
- 第四十九回 各級選手八百ヤード競走¹¹⁾

最後には、「終りて全校一同にて、宝拾ひの余興あり、了れば時正に五時に近し、銃声連発、爆然として閉会を報じぬ、忽ち明倫中学校万歳の声は四方に起りぬ、全くここに此日の会は終りぬ¹²⁾」とレクリエーション的余興で締めくくられた。

以上のように、この運動会では20数種目49番組と各兵法の型、及び各剣客の試合、ならびに余興が行われたことが記されており、記念式典の一環としての色彩が強いものであったように思われる。

なお、この引用中の記述にある(中)とか(大の小)といった記述については、おそらく学年の別を大まかに表したものではないかと推察されるが、少々不明な点があるので更に検討していきたい。

3. 「春期運動会」(明治37年)

明治37年の春の運動会に先立ち、明倫中学では明治36年の秋にも設立「第四回記念運動会」として開催されており、20数種目80数番組にわたって競技が展開された。種目内容については、

春とほぼ変わりはなかったが剣客試合の代わりに野試合が行われたことと、競走種目の番組数が増えるという変化が見え、秘密競走、サック競走、背進競走といったレクリエーション的種目が消えたことが史料には記されている。ただし今回は、明治36年の秋の運動会については、それ以上の詳細はここでは省略する。

翌年の明治37年には愛知一中と明倫中学の連合運動会が第三師団招魂祭典の一環として5月6日に開催された。時間は午前8時から午後2時までの間、33番組によって競われた。

この激戦の結果や様子についても、「明倫」第参号の中で聯合運動会記事¹³⁾として掲載されているが、ここでは省略する。

しかるに、その連合運動会のわずか二日後の5月8日に、明倫中学では春期陸上運動会を開催しているのである。

「月日の駒の足を早み、百花繚乱たりし九十の春光も、何時しか夢の間と過ぎて、木々の若葉は緑り漸く深うなりまさらむし、ただ山隅山隅に余花を尋ねて、楽しかりし且つうれしかりし春の名残を偲ぶのみなる五月の、其の八日を期して、春期大運動会は、我校庭に於て開催せらぬ。

五月八日！此日は如何に我校五百の健児の為に待遠うかりしよ。春期大運動会！此熟語は如何に我校五百の健児の為に切望せられしよ。日々鍛ひに鍛ひたる手並、否足並を示すは実に今日なんめりと、勃勃たる勇気を運動襦衣一枚の下に包みて、校門めがけて集ひ来る健児の顔の、如何に喜びを以て充たされたるかよ。(中略) 既にして競走場の周囲は、来観の老若男女を以て埋められぬ。やがて、校主徳川侯爵閣下及び徳川義恕男爵も臨場せられ、来賓席は帽影参差、花団雲集して、殆ど立錫の余地なきまで至りぬ。¹⁴⁾」
 14) いう冒頭の記述から、明倫中学の生徒たちの運動会に対する期待や、関係者たちからの注目度を推察することができる。結果の記述の方も、各種目の三位までの学年組氏名とともに、一位の者の記録が記されている。少し例をあげてみると、「第一回 二百ヤード競走 (小ノ一)

- 一等賞 第一学年丙組 小林浅太郎(廿四秒)
- 二等賞 第三学年甲組 鈴木春保
- 三等賞 第三学年甲組 佐藤郁三

第二回 提灯競走 (小ノ二)

- 一等賞 第一学年乙組 榊原周一 (一分)
- 二等賞 第一学年甲組 肥田登
- 三等賞 第二学年乙組 安達周三(中略)¹⁵⁾

といった具合である。また、番外については、昼休憩の直後に諸学校選手による器械体操が行われた。

「鉄棒

- 一等 近藤秀一君 (工業)
- 二等 石井一夫君 (一中)

柵

- 一等 江村進以知君 (工業)

全 上 (本校有志者)

甲種 (略)¹⁶⁾

その後、明倫中学の生徒以外の諸学校の生徒による種目について見ていくと、

「番外 尋常小学校生徒有志競走 (二百ヤード)

- 一等賞 花木尋常 永瀬秀吉君 (二十八秒)
- 二等賞 協同鍛冶尋常 青木松太郎君
- 三等賞 明倫尋常 服部鈴吉君

第百十五回 同上選手競走 (二百ヤード)

(本校優勝旗授与)

- 一等賞 共立尋常 山田善太郎君(二十七秒)
- 二等賞 前津尋常 大塚朝吉君
- 三等賞 三蔵尋常 山森賢縣造君

第百十六回 市内各高等小学校選手競走

(四百ヤード) (同前)

- 一等賞 熱田高等 大島初太郎君(四十九秒)
- 二等賞 同 上 奥村久吉君
- 三等賞 第一高等 伊藤政行君

第百十七回 中学程度諸学校選手競走

(二百ヤード)

- 一等賞 第一中学校 加藤清朗君 (十九秒)
- 二等賞 第三中学校 清水石峯君
- 三等賞 第一中学校 沼田順三君¹⁷⁾

等が記されている。その後、職員、来賓等の種目が続き、最後の種目は、

「第百二十三回 各級選手八百ヤード競走

(時事新報賞牌授与)

- 一等賞 第三学年甲組 水野時重(一分五十秒)
- 二等賞 第五学年甲組 志水貞治
- 三等賞 第五学年甲組 大塚健次¹⁸⁾

と記されており、時事新報社からの賞牌が提供されるほど地域の大行事であるとともに、地域の諸

学校との繋がり、交流の様子もうかがえる。時間としては、午前7時30分から午後4時までの8時間余りを費やして、実に合計123番組にわたって、運動会が開催されたことが記されている。

この運動会での変化は、それまでの運動会では定番であった二人三脚、竹馬競走、雨装競走、旗取競走といったレクリエーション的種目と剣客試合が消えたことである。その代わりに、各競走種目の番組数が増加したこと、例えば二百ヤード競走は前年秋の運動会では七番組しか行われていないが、この時は35番組と増えていることが大きな特徴である。

4. 「秋期運動会」(明治37年)

この年の秋は「十一月二十日午前七時より、講堂に於て学校認可記念、校旗拝戴記念の式を挙げらる¹⁹⁾」とあるように、学校認可の記念式が行われ、この記念式典行事の一環として、運動会が開催された。その様子は、「天高く馬肥えて、長風万里、秋声の蕭索たるを伝へ鴻雁は北の寒に堪へずして南に翔り、木葉は秋雨の蕭條に凋萎して、今や條枝を辞せんとす、此時に当りてや、気骨稜々として髀肉の感に堪へざりし明倫五百の健児、何ぞ腕を撫して黙過すべき、如何で此の身神鍛錬の好季を逸すべき。時こそ来れ、ただ聞くも嬉しや、学校にては運動会の噂まちまちにて、春の舞台には不覚をとりぬ、今の秋にいざ目に物みせくれむと、はやくも練習に余念なき健児さへありしが、終に霜月二十日を期して、本校認可記念運動会を挙行すべく定められぬ²⁰⁾」という記述からうかがわれる。

以下に勝者は省略し、原文に基づきながら種目名と記録のみを列挙していく。

- 第一回 二百ヤード (小ノ二) 廿三秒
- 第二回 四百ヤード (大ノ一) 五十八秒
- 第三回 四百ヤード (大ノ一) 五十五秒
- 第四回 二百ヤード (小ノ二) 廿八秒
- 第五回 四百ヤード (大ノ二)
- 第六回 四百ヤード (大ノ二) 五十二秒
- 第七回 二百ヤード (小ノ二) 三十三秒
- 第八回 二百ヤード (小ノ二) 廿八秒
- 第九回 二百ヤード (中ノ二) 廿四秒

- 第十回 戴囊競走 (大ノ一) 廿八秒
- 第十一回 四百ヤード (小ノ一) 五十六秒
- 第十二回 四百ヤード (小ノ一) 一分二秒
- 第十三回 四百ヤード (小ノ二) 一分四秒
- 第十四回 四百ヤード (大ノ二) 五十六秒
- 第十五回 戴囊競走 (中ノ二) 三十七秒
- 第十六回 戴囊競走 (大ノ一) 廿八秒
- 第十七回 片脚競走 (大ノ一) 三十九秒
- 第十八回 片脚競走 (中ノ一) 四十一秒
- 第十九回 片脚競走 (中ノ二) 四十一秒
- 第二十回 六百ヤード (大ノ二) 一分三十二秒
- 第二十一回 六百ヤード (大ノ二) 一分三十秒
- 第二十二回 千二百ヤード (大ノ一) 三分二十五秒
- 第二十三回 戴囊スプーン (小ノ二) 四十六秒
- 第二十四回 戴囊スプーン (小ノ一) 五十三秒
- 第二十五回 戴囊スプーン (中ノ二) 三十秒
- 第二十六回 二百ヤード 廿六秒
- 第二十七回 二百ヤード (大ノ二) 廿四秒
- 第二十八回 片脚競走 (小ノ一) 五十秒
- 第二十九回 片脚競走 (小ノ二) 一分
- 第三十回 提灯競走 (中ノ一) 一分三秒
- 第三十一回 提灯競走 (中ノ二) 五十八秒
- 第三十二回 戴囊スプーン (大ノ一) 四十秒
- 第三十三回 戴囊スプーン (大ノ二) 三十四秒
- 第三十四回 障害物競走 (小ノ一) 一分十三秒
- 第三十五回 障害物競走 (小ノ一) 一分四秒
- 第三十六回 障害物競走 (中ノ二) 一分十八秒
- 第三十七回 障害物競走 (中ノ二) 一分三十秒
- 第三十八回 六百ヤード (大ノ一) 一分二十六秒
- 第三十九回 提灯競走 (小ノ二) 四十九秒
- 第四十回 提灯競走 (小ノ一) 五十三秒
- 第四十一回 提灯競走 (中ノ二) 三十八秒
- 第四十二回 提灯競走 (小ノ一) 五十八秒
- 第四十三回 戴囊スプーン (中ノ一) 三十四秒
- 第四十四回 戴囊スプーン (中ノ二) 三十六秒
- 第四十五回 二百ヤード (大ノ一) 廿四秒
- 第四十六回 二百ヤード (大ノ二) 廿四秒
- 第四十七回 二百ヤード (大ノ二) 廿五秒
- 第四十八回 千ヤード (中ノ一) 二分三十七秒
- 第四十九回 千二百ヤード (大ノ二) 三分三十一秒
- 第五十回 スプーンレース (小ノ一) 三十秒

第五十一回	四百ヤード (中ノ二)	五十八秒	第八十六回	二百ヤード (中ノ二)	廿五秒
第五十二回	四百ヤード (中ノ一)	五十九秒	第八十七回	二百ヤード (中ノ二)	廿六秒
第五十三回	四百ヤード (中ノ一)	五十一秒	第八十八回	二百ヤード (中ノ二)	廿八秒
第五十四回	四百ヤード (中ノ一)	五十三秒	第八十九回	二百ヤード (中ノ二)	廿八秒
第五十五回	スプーンレース (小ノ二)		第九十回	八百ヤード (大ノ一)	二分二秒
		三十四秒	第九十一回	八百ヤード (大ノ二)	二分六秒
第五十六回	スプーンレース (小ノ一)		第九十二回	スプーンレース (中ノ二)	
		三十六秒			三十六秒
第五十七回	障害物競走 (中ノ一)	一分二秒	第九十三回	スプーンレース (中ノ二)	
第五十八回	障害物競走 (大ノ二)	一分三秒			三十五秒
第五十九回	障害物競走 (大ノ二)	一分七秒	第九十四回	戴囊競走 (中ノ一)	廿八秒
第六十回	障害物競走 (大ノ一)	一分八秒	第九十五回	千ヤード (大ノ二)	三分八秒
第六十一回	二百ヤード	廿五秒	第九十六回	片脚競走 (大ノ一)	三十七秒
第六十二回	六百ヤード (中ノ二)		第九十七回	二百ヤード (中ノ一)	廿八秒
		一分三十一秒	第九十八回	三四五年正副組長八百ヤード	
第六十三回	六百ヤード (中ノ一)				二分四秒
		一分二十一秒	第九十九回	六百ヤード (大ノ一)	一分十二秒
第六十四回	片脚競走 (大ノ二)	五十一秒	第百回	六百ヤード (中ノ一)	一分十五秒
第六十五回	片脚競走 (大ノ二)	四十秒	第百一回	一二年正副組長八百ヤード	
第六十六回	戴囊競走 (小ノ二)	三十一秒			二分十一秒
第六十七回	戴囊競走 (小ノ一)	廿九秒	第百二回	八百ヤード (大ノ二)	二分十四秒
第六十八回	戴囊競走 (小ノ一)	三十三秒	第百三回	三四五年クラスラレー	
第六十九回	本校職員二百ヤード	三十二秒			二分五十八秒
第七十回	六百ヤード	一分三十八秒	第百四回	片脚競走 (中ノ一)	廿六秒
第七十一回	八百ヤード (大ノ一)		第百五回	本校職員スプーン二百ヤード	
		一分五十六秒			四十秒
第七十二回	戴囊競走 (中ノ二)	三十三秒	第百六回	スプーンレース (中ノ二)	三十八秒
第七十三回	戴囊競走 (中ノ二)	三十四秒	第百七回	二百ヤード (中ノ一)	廿八秒
第七十四回	戴囊競走 (中ノ二)	三十五秒	番外	諸学校選手二百ヤード	廿四秒
第七十五回	武装二百ヤード (大ノ一)	廿八秒	番外	諸学校選手八百ヤード	一分四十一秒
第七十六回	武装二百ヤード (大ノ一)	廿六秒	第百八回	各級二百ヤード選手競走	
第七十七回	武装四百ヤード (大ノ一)				(時事新報寄贈賞牌) 廿四秒
		一分二秒	第百九回	四百ヤード	一分四十一秒
第七十八回	八百ヤード (中ノ二)	二分三秒	第百十回	二百ヤード (中ノ一)	廿六秒
第七十九回	八百ヤード (中ノ一)	二分四秒	第百十一回	三四五年正副組長二百ヤード	
第八十回	スプーンレース (大ノ一)	三十七秒			廿六秒
第八十一回	スプーンレース (大ノ一)		第百十二回	二百ヤード (中ノ一)	廿五秒
		三十五秒	第百十三回	戴囊競走 (中ノ一)	三十四秒
第八十二回	スプーンレース (大ノ二)		第百十四回	戴囊競走 (大ノ二)	三十一秒
		三十六秒	第百十五回	戴囊競走 (大ノ二)	三十秒
第八十三回	六百ヤード (中ノ二)	一分十二秒	第百十六回	四百ヤード (中ノ二)	一分二秒
第八十四回	一二年クラスラレー		第百十七回	四百ヤード (中ノ二)	一分三秒
		一分五十八秒	第百十八回	四百ヤード (中ノ二)	一分
第八十五回	千ヤード (大ノ一)	二分五十五秒	第百十九回	戴囊競走 (大ノ一)	三十三秒

- 第百二十回 一二年正副組長二百ヤード
廿五秒
- 第百二十一回 四百ヤード（大ノ一）五十一秒
- 第百二十二回 スプーンレース（中ノ一）
三十四秒
- 第百二十三回 スプーンレース（中ノ一）
三十二秒
- 第百二十四回 千二百ヤード（中ノ二）
三分三十二秒
- 第百二十五回 二百ヤード（大ノ一）三十三秒
- 第百二十六回 スプーンレース（中ノ一）
三十一秒
- 第百二十七回 千二百ヤード（中ノ一）
三分三十三秒
- 第百二十八回 スプーンレース（大ノ二）
三十二秒
- 第百二十九回 各年級八百ヤード選手
（東京日々新聞賞牌）一分五十八秒
- 第百三十回 尋常小学校選手二百ヤード
（本校所定優勝旗授与）三十五秒
- 第百三十一回 高等小学校選手四百ヤード
（本校所定優勝旗授与）五十五秒
- 第百三十二回 本校職員八百ヤード 二分三秒
- 第百三十三回 来賓競走二百ヤード 廿五秒
- 第百三十四回 有志競走八百ヤード
一分五十八秒
- 番外 二百ヤード一等勝利者決戦競走 廿四秒
- 番外 四百ヤード一等勝利者決戦競走
五十六秒
- 番外 六百ヤード一等勝利者決戦競走
一分三十秒
- 番外 八百ヤード一二三等勝利者決戦競走
（大阪毎日賞牌）一分三十五秒
- 番外 千ヤード一二三等勝利者決戦競走
二分五十秒
- 番外 千二百ヤード一二三等勝利者決戦競走
三分三十九秒²¹⁾

以上のように、この運動会では番外を含め実に27種目140番組にわたる競技が実施されたことが記されており、このことは前年のレクリエーションな運動会と比べると、競走会といえるような競技会への急速な変化を表している。この変化は驚くほどのことであり、また時事新報社だけでなく、東京日々新聞、大阪毎日新聞と

いった各新聞社が賞牌を提供していることから、社会的な評価と規模の拡大を推しはかることができる。

なお、明治38年以降に明倫中学で開催された運動会については、今回、詳細な史料提示は省略して、番組数の推移の紹介のみしておく。

明治38年 春（4月30日）

開校記念運動会 139番組

明治38年 秋（10月15日雨天、17日）

記念陸上運動会 107番組

明治39年 春（5月6日）

春季陸上運動会 120番組

明治39年 秋（10月13日）

秋季陸上運動会 121番組

明治40年 不明

明治41年 春（5月6日）

春季陸上運動会 119番組

明治42年 春（5月6日）

春季陸上運動会 92番組

明治42年 秋（10月13日）

秋季陸上運動会 65番組

明治43年 春（5月6日）

10周年記念運動会 120番組

明治44年 春（5月6日）

春季陸上運動会 120番組²²⁾

この間様々な要因が関わって運動会が進展していくが、今回みてきた変化を継続しつつ、競走中心の運動会が展開されながら、明治期を終えていく。

おわりに

以上のように、明治36年と37年の私立明倫中学校において開催された運動会の事例を中心にみてきた。種目については数、内容とも激しく変化していく時期であったことがこれらの史料からも十分うかがわれた。また、運動会開催の背景や運動会を記念式典の重要な行事としてとらえる性格が非常に強いという、明倫中学独自の特徴をも見ることができた。

中学校としての整備が多少遅れていたと思われる明倫中学は、日比野寛を校長として招き入れてから、教育環境が急速に進展していったと考えられる。そのことは、校友会活動や運動面

においてもうかがわれる。その一例として、明倫中学は設立の歴史が古いにもかかわらず、校友会雑誌の創刊は日比野が赴任した年からであったことからもうかがわれた。そして、当時開催されていた東海五県聯合野球大会の優勝に導いたりして、各スポーツ活動に対しても、彼の影響は多大なものであった。

運動会の記録についても、他の中学の校友会雑誌の記述と比較して、毎年詳細な記録が記されており、その発展の様子を細かく読み取ることが可能である。例えば、近隣小学校や近隣諸学校の生徒を参加させて、優勝者に賞を与えたり、各新聞社より賞牌を提供させたりしていることを知ることができ、地域への拡がりや地域貢献という意味でも、日比野校長の影響のもと、この時期の運動会が果たした役割をうかがうことができた。

今回は史料提示ができなかったが、この後の明治期に開催された運動会についても、今後検討してその実態を明らかにしていこうと考える。

引用・参考文献

- 1) 入江克己：近代天皇制と明治神宮競技大会『運動会と日本近代』青弓社，161(1999)
- 2) 須永詮太郎：学友会各部沿革史○陸上運動『学林第六十九号』愛知県第一中学校，一誠社，2(1910)
- 3) 愛知県立明和高等学校史，「明和会」明和高等学校設立五十周年記念事業実行委員会，51-56(1998)
- 4) 日比野寛：運動の真義『学林第六十二号』愛知県第一中学校，一誠社，56(1906)
- 5) 同上，57
- 6) 私立明倫中学『明倫 第壱号』一誠社，93-104(1903)
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 私立明倫中学『明倫 第参号』一誠社88-90(1904)
- 14) 同上，92
- 15) 同上，92-93
- 16) 同上，100
- 17) 同上，102-103
- 18) 同上，103
- 19) 私立明倫中学『明倫 第四号』一誠社136-145(1905)
- 20) 同上

21) 同上

22) 私立明倫中学『明倫 第六号』一誠社(1906)から『明倫 第二十号』(1913)までより抜粋